

1934年～1945年 新東工業グループの創業  
 1946年～1973年 鑄造技術の深化  
 1974年～1990年 企業基盤の整備と海外展開  
 1991年～2005年 成長に向けた企業体質の強化  
 2006年～2017年 One Global Sintoの強化  
 2018年～ 持続可能な社会の実現に向けて

新東工業の歩み

豊田自動織機製作所で豊田佐吉氏の薫陶を受けた久保田長太郎がモールドینگマシン(造型機)の開発に着手し、国産第1号の造型機を製作しました。その後、鑄造機械製造の技術開発を進め、1934年に新東工業の前身である久保田製作所を設立したのが当社の原点です。日本の鑄造技術の向上と鑄造設備の国産化に尽力し、日本の近代化を支えました。

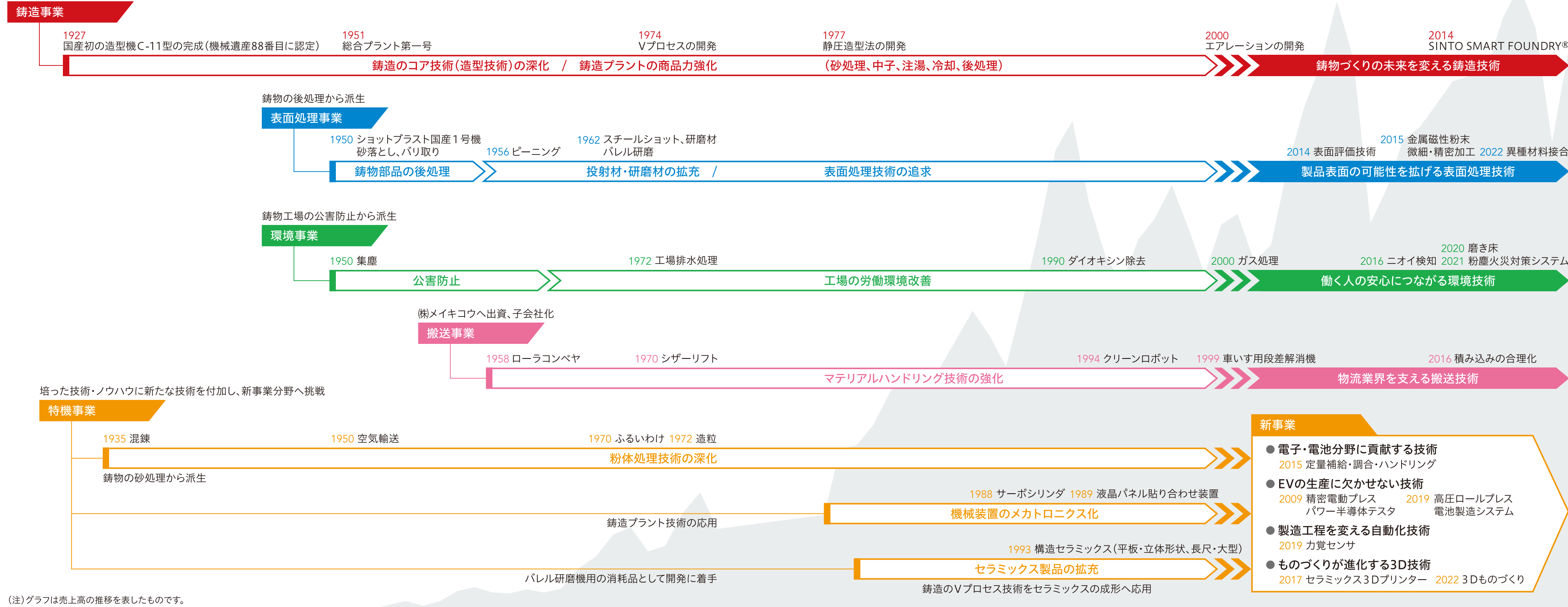
戦後の混乱期を乗り越え、さらなる発展に向け、造型機単体だけでなく鑄物の製造工程全体をカバーする鑄造プラントの開発を推進しました。この間、表面処理、環境、搬送分野へ事業の多角化を進めるとともに、米国ホイールアブレーター社との提携により技術力の向上が加速しました。創立25周年(1960年)には、次の成長に向けた転換期と捉え、新東工業へと改名しています。

「総合エンジニアリング体制」「国際的企業への飛躍」を旗印に企業基盤の充実を図りました。鑄造では「Vプロセス」「静圧造型法」などの画期的な技術の開発により世界の注目を集めることとなりました。そして、台湾を皮切りに欧州、北米、南米、東南アジアと海外拠点を整備し、現在のグローバル基盤の礎を築いていきました。

事業環境が大きく変化する中、進化し続ける組織作りに向けた企業体質の強化に加え、米・欧・アジアの世界3極体制を確立し、海外への技術移転を積極的に進めました。また、事業ごとの独立採算を進めるとともに、新たな収益源として設備メンテナンス・アフターサービス事業の強化・充実を図り、利益体質を確立する3魅一体のビジネスモデルを構築しました。

人材に関する独自の考え方「活人主義」を打ち出し、人材の育成と活性化を強力に推進してきました。また、新東工業グループとしての連結体制強化に向け、国内外のグループ会社を再編、コンプライアンス、リスク管理を含むガバナンス体制を強化しました。さらに、時代の変化が徐々に激しくなる中、社会のニーズに即応し、EV、ロボット、医療関連の新分野の技術開発に着手してきました。

2034年の創業100周年に向け、社会に認められ必要とされる企業として、SDGs達成、カーボンニュートラル実現など持続可能な社会の実現に貢献していきます。さらに、社会のニーズに応えられるよう、今まで培った技術の応用により、さらなる技術開発を進め新たな価値を提供することで、企業価値の向上につなげていきます。



**社会状況**

1927～ 造型機は全て輸入に依存。日本は鑄物づくりの技術が乏しく、造型機本来の機能を発揮することが至難だった。

1955～ 高度経済成長期(1955～1973年)に入り、自動車需要の急速な進展に併せて、銑鉄鑄物生産は急拡大。増産の必要性から設備投資意欲が高まり、鑄造機械の需要が増加。

1967～ 高度経済成長は国民生活を豊かにする反面、公害問題が深刻化。公害対策基本法が公布される。

1973～ 石油危機の始まり。石油の99%を輸入に頼ってきた日本の産業は、大打撃を受ける。

1990～ 急激な金融引き締めにより、異様とも言える熱気に包まれていた日本のバブル経済が崩壊。デフレ経済へと突入。

2008～ リーマンショックにより、米国や欧州のみならず、新興国の景気も急速に悪化し、積極的なグローバル対応を推し進めてきた日本の製造業も影響を受け、設備投資関連業界が鈍化。

2011～ 東日本大震災の発生で建造物、鉄道・道路・空港・電力・ガス・通信をはじめとするインフラ、企業の損害、また被災地域のみにとどまらず、日本中のサプライチェーンが壊滅的な損害を受ける。

2018～ グローバル化からの成長期に続き、コロナ禍による時代変化。第4次産業革命でAI、IoT、EVシフトが急速に変化し、新たなビジネスモデルや生活様式が生まれる。情報技術を活用した仕事の進め方や多様な働き方が求められる。